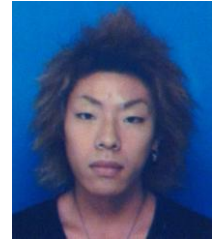


文化変容に伴う住居形態と集団の変化

一宮古島狩俣における宗教的空間に着目して一



K09065 田中 文滋

Keywords

クラン 祭祀集団『ムトゥ』 宗教的空間

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

社会集団は多種多様である。なぜならば社会集団毎に個性や文化的背景が異なるからである。例えば家族という単位で見ると住居も様々なものがある。空間に加えて、趣味に関するものや嗜好品などそれぞれの家庭で個性が色濃く表れる。

社会集団は系譜をたどることの出来る『リネージ』と、系譜をたどることの出来ない『クラン』に分類することが出来る。例にあげた家族はリネージにあたるが、クランとはどのような集団なのだろうか。

クランとは、神話・伝説上の人物を始祖とし、共通の出自をもつ人々によって組織された社会集団を意味する。

このような集団は現代の日本にも存在し、例の1つとして宮古島の狩俣にあるムトゥがそれにあたる。ムトゥは複数のグループから構成される祭祀集団のことで、それぞれのグループが別々に祭祀を行う。

このような社会集団はさらに下位集団に分類され、それぞれに特徴があることが知られている。その1つの例として、北タイの山地における山地民ラフ族を挙げて説明したい。彼らは同じ民族集団(クラン)の中にサブクランと呼ばれる下位集団を持つ。それらの下位集団はそれぞれが異なる上着、パンツ、ヘッドドレスなどを持つ。また、住居の型式に関しても違いが見られる。実際に、Lahu Nyi、Lahu Sheh Leh、Christian Lahu のグループ毎に下図のような住居形式の違いが見られる。

宮古島狩俣のムトゥに関してもグループ毎に生活スタイルに違いが現れ、その結果住宅にも特徴が存在するのではないだろうか。

本研究では、宮古島狩俣に存在する祭祀集団ムトゥが集落の人々にどのような影響を与え、結果として人々の住む住居にどのような特徴を生み出したのかを究明することを目的とする。あわせて、文化変容に伴って変化してきた住居の形態、そしてムトゥを中心とした狩俣住民の集団としてのあり方についても図面を中心とする調査資料から読み解き、考察していく。

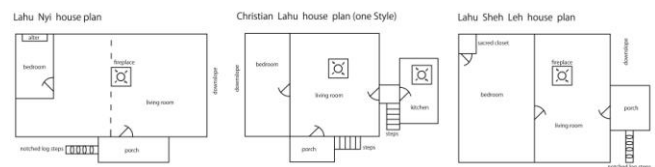
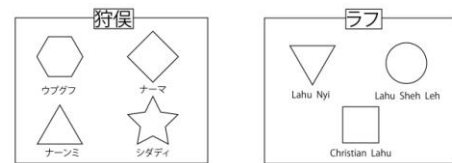


図1 社会とクランの関係及びラフ族の住居パターン

1.2 研究方法

本研究は2012年7月25日から8月10日の日程で宮古島の狩俣で行ったフィールドワークに基づく。

フィールドワークの内容は、図面作成、聞き取り調査、儀礼の参与観察である。

図面に関しては平面図と屋敷図を作成し、それぞれ1/50と1/200のスケールで統一した。図面には、空間の構成を理解する為に、空間内の家具などの生活物品も記した。

聞き取り調査は、事前に作成したインタビューシートを利用した。質問内容は、狩俣の歴史や祭祀集団に関してのみならず、集落の人々の生活様式や、住居の使い方、住居の歴史などについても聞き取りを行った。

実測件数はそれぞれ平面図が42軒、屋敷図が42軒、インタビューシートが46軒である。実測件数の差異は実測した住居の住民の意向などが要因である

2. 調査地の概要

2.1 宮古島の概要

宮古諸島は80にも及ぶ島々から成る琉球列島の1つに含まれ、かつては『ミヤーク』と呼ばれていた。この宮古諸島の1部として宮古島があり、宮古諸島には、宮古島以外に、池間島、大神島、来間島、伊良部島、下地島、多良間島、水納島の7つの有人島が存在する。

宮古島は、石垣島から東北東の方向に約135km、沖縄本島からは南西の方向に約300kmの場所に位置する。島全体はあまり高低差が見られず平坦で、山岳部は少なく、大きな河川もない。近海ではサンゴや熱帯魚が生息し、その優れた景観から観光地としても有名である。

2.2 狩俣の概要

狩俣は宮古島の北端にあり、北緯約25°、東経約125°に位置する。行政的に宮古島市に属する。

住民はサトウキビ栽培を主とした農業やモズク栽培、漁業などを主な生業としており、家庭によっては市街に働きに行く者もいるが、多くの人々が現在も半農半漁のスタイルを保っている。

狩俣の地名は狩俣西の浜付近の形状に由来しているという。昔、戦で使われた弓矢の矢柄の先端につける鏃の一種として『狩俣』と呼ばれるものがあつた。西の浜で左側に位置する西平安名崎、そして右側に位置する世渡崎、これら2つの崎の位置関係や形が鏃の形に似ており、そのために狩俣と呼ばれるようになったと伝えられている。

かつて集落全体は石垣で囲まれていた。これは集落住民以外の人間が外から侵入しないようにする為のものであつた。このように居住空間が固定されていたことから、村落移動がなかったということがわかる。

3. 祭祀集団『ムトゥ』

3.1 氏族(クラン)

氏族とも呼ばれるクランは、明確に系譜をたどることの出来ない集団を意味し、神話・伝説上の共通の始祖を持つ人々の集まりを指す。クランには、名称やシンボルなどにより集団の統一を行い、それらを儀礼を通して表現しているものもある。クランにはこれ以外にもいくつかの特徴が存在し、外婚を禁じるものなどがある。

3.2 ムトゥ(元)

宮古島狩俣に存在する祭祀集団『ムトゥ』は内部で複数のグループに分かれている。特に主要な4グループには、島建ての神を祀る『大城元(ウプグフムトゥ)』、航海安全にまつわる神を祀る『仲間元(ナーマムトゥ)』、五穀豊穡にまつわる神を祀る『志立元(シダディムトゥ)』、水の神を祀る『仲嶺元(ナーンミムトゥ)』がある。

ムトゥはグループ毎にムトゥヤーと呼ばれる建物を持ち、そこでそれぞれが別々に祭祀を行う。しかし、ムトゥヤー以外にウタキと呼ばれる場所があり、ウタキには神役である女性しか行くことが出来ない。言い換えればムトゥヤーはウタキに行くことが出来ない神役でない女性、もしくは男性が祈る為の場所と言える。また、ムトゥヤーは男性の礼拝所と女性の礼拝所で分かれており、祭祀自体も男女別々に行う。

4. 狩俣の住居

4.1 伝統的な住居

琉球地方の住居は元々、『主屋』と呼ばれる棟と『トーグラ』と呼ばれる棟の2つから成り立っていた。現在はこれらの機能が1つの建物の中に混在するものも多く見られるが、かつてはそれらを分離するのが主流だった。

主屋とは土間のない矩形もしくは方形の建物である。最も初期のものはこれに中柱があるだけのシンプルなものでも部屋の区別はなくどのように部屋が使われていたのかは明確ではない。しかしトーグラは主屋の西側に建てられるのが良いとされていた。その為、自ずから西側の入口方向とは逆側が家族が食事をするスペースに使われていたと推測できる。そして入口付近は接客や居間として使われ、残った東側の入口の反対方向で就寝を行っていたと考えられる。

次に機能の分離に伴い、空間を手前と奥で分けるようになった。この地方ではそれぞれ、手前方向を『表座』、奥方向を『裏座』と呼ぶ。その後、表座を東方向から『一番座』、『二番座』というように分けて使うようになっていく。更に、一番座にはトコが造られるようになっていく。トコは掛け軸や置物などの縁起物を配置する為の空間である。裏座に関しても同様に部屋として分離が行われていった(『一番裏座』、『二番裏座』と呼ぶ場合もある)。

また玄関がないのも特徴であり、入口として表座の戸を利用していった。これが変化していった結果、縁側を造るのが主流になっていく。縁側は客人が住居の中に上がらない時に座って話し合う為の空間としても機能した。

トーグラは土間、カマドを持ち炊事を行う為の建物を指す。古い形では中柱を持ち、棟の隅にカマドを置いた。

トーグラでは『ウカマガン』と呼ばれるものを祀っていたという。これは現在の狩俣の台所に多く見られた『火の神』のルーツにあたるものと推測出来る。また、トーグラは必ず主屋の西に建てられるものであったという。

4.2 住居内における3つの宗教的要素と空間の関係

4.2.1 仏壇

仏壇は仏像や位牌を安置して、亡くなった親族に住居内で礼拝する為のものである。現在の狩俣の住居においては主に二番座に置かれることが多い。

この地域に仏教が広まったのは、1265年から1273年の文永年間に僧禅鑑が琉球に来て、浦添城西に極楽寺を創建したのが始まりであると言われている。

4.2.2 火の神

火の神とは台所の出窓部分に置かれるもので、現在では厄を除ける為に供えている家庭が多い。線香をたてる為の鉢、水、塩、花瓶などが置かれるのが一般的である。

住居内の台所部分に火の神を祀る習慣はヒノ神信仰に由来すると言われている。ヒノ神は3体の神から成るもので、その3体の中でも聞得大君由来記に記されている御日の御前(太陽神)を祖先神とする。この太陽神は女性神と考えられる。

4.2.3 マウ棚

マウ棚とはマウ神を祀る為の祭壇であり、マウ神とはシマ(村落)全域に鎮座する神、天地、さらにそれを越え日本、世界などのあらゆる神々をひとつにつないだ神であるという。聴き取り調査を行った結果、マウ神を個人個人の守り神として捉えている人が多かった。

現在の狩俣の住居において、マウ棚は二番座で仏壇の隣に配置される傾向がある。

4.3 固有の民俗方位

4.3.1 45°のズレ

フィールドワークを通して、狩俣特有の民俗方位が存在することが分かった。これは自然方位における『北』が、民族方位における『北東』というように、時計回りの方向に45°ずれた観念である。

先行研究によればこの観念は宮古島の隣にある来間島でも見られたので、狩俣だけでなく他の地域にも影響が及んでいると考えられる。

4.3.2 東方崇拜

東の方角は神の出入りする方位とされている。その結果、琉球地方では東方向を崇拜し、住居内における1番座などの主要な部屋を住居の東端に配置した。

5. 狩俣の住居の分析

狩俣で実測した住居において様々な視点から分析を行った。まずムトゥ毎の住居の比較を、その後ムトゥによらない、住居全体の傾向を探った。

5.1 ムトゥ毎の住居の分析

ここでは実測することの出来たウブグフムトゥ、ナーマムトゥ、シダディムトゥ、ナーンミムトゥ、どれにも属していない無所属の5つのグループ毎で類型化を行った。その1例を以下の図2に示す。分析項目は主にムトゥ毎の住居の分布、住居内を構成する要素の傾向、宗教的空間に関する傾向についてである。

5.2 ムトゥによらない住居の傾向

ここではムトゥによらない住居全体の傾向について分析を行った。分析項目に関してはムトゥ毎の住居の分析とほぼ同じ内容である。

6. 考察

6.1 縁側の消失

分析を行った結果、狩俣の住居から、この地域の住居の特徴である縁側がなくなりつつあることがわかった。これは『プライバシーの重要視』という近代的な概念の流入により、徐々に縁側がなくなっていったと推測出来る。

その延長線上にある結果として、高齢者の孤独死などが考えられるだろう。

6.2 仏壇の移動

分析を行った結果、仏壇の配置場所の風習が変わりつつあることがわかった。これは集落住民にとっての仏壇に対する観念がパブリックなものからプライベートなものに変わってしまい、その結果が一番座から二番座への移動をもたらしたと推測出来る。

6.3 中廊下の出現

分析を行った結果、かつてこの地域には見られなかった建築的要素である中廊下が主流となりつつあることがわかった。

	タイプ①	タイプ②	タイプ③	タイプ④	タイプ無
ウブグフ	64, 73, 79 134, 221	57, 62, 67 138, 147	145, 165 186		3 56, 142
ナーマ	7, 30, 38 43, 54, 82, 154	8, 76 126		155	142, 150 136
シダディ	203			219	
ナーンミ			16		
無所属	4 223		9, 41, 45 47, 144		10 26, 48

ムトゥ毎の住居をそれぞれ、
 タイプ①：南北方向に中廊下を持ち、それを一番座、二番座が挟んでいるもの。また、台所が裏座にあるもの。
 タイプ②：南北方向に中廊下を持ち、それを一番座、二番座が挟んでいるもの。また、台所が表座にあるもの。
 タイプ③：一番座と二番座の間に廊下を持たないもの。
 タイプ④：家の東端(東南)に廊下を持ち、西側もしくは北側に部屋をもつもの。
 タイプ無：上のどのタイプにも当てはまらないもの。
 の5つのタイプのいずれかに分けて類型化を行った。

図2 住居の類型化の1例

これは様々な要因が考えられるが、主にプライベートとパブリックの空間を合理的に分けるためのものであり、これも近代的な考え方が流入してきたためだと考えられる。

6.4 ムトゥと住居の関連性

分析を行った結果、ムトゥ毎の住宅には決定的な傾向のようなものは見られなかった。

要因として、全てのムトゥのメンバーが分離されることなく、同じ場所で居住してきたことなどが挙げられる。

7. おわりに

前章の分析を通して、狩侯の住居全体にいくつかの傾向が見られたわけだが、これは文化変容に伴う住居の形態変化であると言える。一番座、二番座のような間取りのように既存の様式を保ち続けているもの、縁側のようになくなったもの、中廊下のように新しく導入されるようになったものがあり、これらの変遷を経て今の狩侯の住居の形態がある。不要とされるものがなくなり、必要とされるものが導入されたため、利便性、機能性は変化を重ねる毎に向上したと言える。これは一種の住居の進化であると言えるのではないだろうか。しかし、それと同時に失ったものや、将来起こりうるリスクもある。これは住居だけでなく、現代社会の様々なことにも共通して言えることである。利便性を求めすぎた故にそれとは相反することがあが失われてしまうのである。その代表的なものは人と人との繋がりが挙げられるだろう。

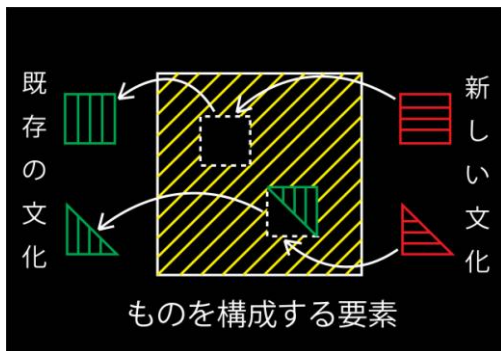


図3 建築物を含めた物質文化の変遷

筆者はムトゥのような地域に根付いたグループ意識は重要であり、クランには現代社会特有の問題を解決できる可能性が秘められていると考える。現在の狩侯のムトゥは祭祀の場でしか活動の場がないが、クランは本来、社会生活上の多様な側面、協働、儀礼、分配などの単位となるものだった。

活動を祭祀に限定して、内在するキャパシティーを持って余してしまうのではなく、既存のグループ意識を地域のためにより有効利用しようというものである。

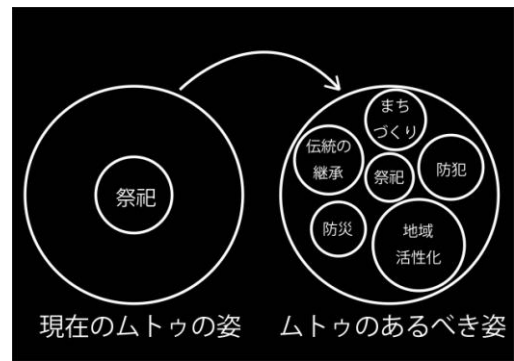


図4 現在のムトゥとあるべき姿

そしてクランを持たない私達のような社会においても、クランの代わりとなるような地域に根付いた汎家族的グループ意識を持つことは、集団化の意識が希薄な都市生活において、多くのメリットをもたらすのではないだろうか。

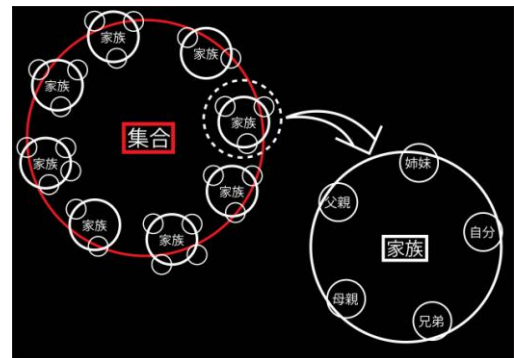


図5 クランの代わりとなる集団の組織化

参考文献

- 1) 石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良、蒲生正男、佐々木高明、祖父江孝男「文化人類学事典」『弘文堂』：1994（330-331）
- 2) 上原孝三「宮古島の祭祀歌謡から見た女神」：2000（86-88）
- 3) 鶴藤鹿忠「琉球地方の民家」『明玄書房刊』：1972
- 4) 野村孝文「南西諸島の民家」『相模書房刊』：1961
- 5) 青木正男、岡俊江、鈴木義弘「中廊下の住宅～明治大正昭和の暮らしを間取りに読む～」『住まいの図書館出版局』：2009
- 6) Paul Lewis、Elaine Lewis「People of the Golden Triangle」『Thames and Hudson』
- 7) 社団法人日本建築学会「大震災に備えるシリーズⅡ 復興まちづくり」社団法人日本建築学会：2009